

◎二〇二五年(令和七年)「聖典に親しむ会」豊平班の担当等について

二〇二五年五月二三日

一. 担当箇所等

○ 発表範囲(座功德・主功德)

- ① 『真宗聖教全書』P298 終わりから4 行目からP303 終わりから4 行目まで
- ② 『解読浄土論註』(改訂版)P86 終わりから6 行目からP110 の3 行目まで
- ③ 『浄土真宗聖典』七祖篇(西)P78 の5 行目からP86 の6 行目まで

○ 発表分担

- ① 衆生名義(問答) ——— 新宅昌紀
  - ② 座功德 ——— 新宅昌紀、(佐々木忠義)
  - ③ 身業功德 ——— 新宅昌紀
  - ④ 口業功德 ——— 河野繁典
  - ⑤ 心業功德 ——— 河野繁典
  - ⑥ 大衆功德 ——— 森 昭義、(栗栖哲義)
  - ⑦ 上主功德 ——— 栗栖哲義
  - ⑧ 主功德 ——— 栗栖哲義
- \* オブザーバー参加 濱中紅枝、菊池詔二

二. その他

- ① 佐々木忠義、森昭義氏は体調不良等のため、新宅昌紀、栗栖哲義が代わって発表する。
- ② 広島・島根班と同一箇所が担当範囲とされているが、相談の結果更なる分割は行わず、両班が重複して担当箇所の発表をすることとなった。
- ③ 豊平班では道場の定例会座終了後2時間を別途に勉強会を開催したが、今後はもっと頻度を上げて開催するようにしたい。

——— 以上 ———

◆衆生名義の詳細

1、衆生世間を明かす。

①衆生世間清浄を観ずるに二つある。つぎに衆生世間の莊嚴が清浄にまっとうしたさまを観察する。

この門のなかを二つに分ける。

・観察門では、器世間と衆生世間、それぞれの莊嚴の成就を観察することを示される。

・器は衆生に受用せられるもの意。故に器世間とは山河・大地・草木など衆生に受用せられる世界。対して衆生世間とは、有情を構成している心身の世界。

・世間の意味は多数ある。大意として、まよいの世界、教化の対象の世界をいう。世間を超越した仏・菩薩の境界を出世間という。

ここでいう世間は、私たちに分かりやすく伝えるように説かれた自然環境としての器世間と、同じく生きとし生けるものを摂取せんと、具体的な様子をもって説かれた衆生世間のふたつの意味である。

・清浄とは、国土莊嚴では第一の清浄莊嚴功德をもって総相とされている。国土が清浄であれば、その主たる仏も、眷属たる菩薩も同様である。

・観察とは、ヴィパシユヤナーの漢訳で、音写では毘婆舍那、毘婆娑那。対象を正しく観察すること。私が仏を観察するのではなく、仏が私を観察したもうことをお聞かせいただくところであろうか。

【私釈】

清浄とは。清は澄むの義。静まった澄んだ水は、それを覗き込む人物をそのままに写し、写すことよって、あるがままの相を、その人に知らせることができる。浄は浄化の義。穢れたものを浄化してすくいとる。浄化するとは、摂化することである。たとえば礼拝でいえば、頭を下げるはずのないものに、菩薩は頭を下げる功德を与え、礼拝の行を行行者の上に成就してくださる。

②仏莊嚴功德と菩薩莊嚴功德

一には、阿弥陀如来の莊嚴の功德を観察する。

二には、かの国の諸々の菩薩の莊嚴の功德を観察する。

・仏莊嚴功德は八種、菩薩莊嚴功德は四種。先の器世間莊嚴功德は十七種で、これらの二十九種をもって、天親菩薩は、阿弥陀仏・阿弥陀仏の国土・その国土の菩薩の功德を顕された。

③阿弥陀如来の莊嚴功德に八種ある。

如来の莊嚴の功德を観察するところは八種をかぞえるが、その名は文に至って見ることにする。

- ・八種の仏莊嚴功德成就。
- ・八種とは。

持  
①座 ②身業 ③口業 ④心業 ⑤衆（大衆） ⑥上首 ⑦主 ⑧不虛作住

・功德とは、多数の解釈がある。ここでは、すぐれた徳性、そしてすぐれた結果をもたらす能力という意味であろう。

・成就とは。ここでは身にそなえている、得たものをたもっている、願いが達成されること等の意味であろう。

2、問答。

【問い】

ある論師たちは、一般に衆生という名の意味を解釈するに、三界をめぐりめぐって衆生の生死をうけるから衆生と名づける、といている。とすれば、いま仏と菩薩を衆生というのはどのようなわけであるか。

【答え】

①涅槃經の意に拠る。

『經』（涅槃經）に言う。

「一つの法には無数の名があり、一つの名には無数の意味がある」と。

【感想】この御言葉から、自己の思い込みや思い上がり等を知らされます。

何か知識を得れば、それが間違いないものと決めつけ、得てして新たな学びに身が入らず、視野を狭めることになります。法門無尽、頭を下げて学んでいこうと思います。

○衆生とは、『仏教語大辞典』中村元著より

①いのちあるもの。特に人間を指し、新訳では有情という。

- ・衆人ともに生ずるもの
- ・衆多の法が仮に和合して生ずるもの
- ・衆多の生死を経るもの

②実体としての生きもの

③尊敬すべき人々。大乘仏教徒。

④ブツダとなりうる要素、本質。

⑤仲間たち。

②小乗家の釈

衆多の生死をうけるから衆生と名づけるというのは小乗の教えを伝える人

たちが、三界の中の衆生という名の意味を解釈したもので、大乘の教えをうけ継いでいる人たちがいう衆生の意味ではない。

【詳細】

・「衆多生死」とは何か。

・『大乘同性経』

「衆生とは、衆物和合すること、地水火風空識由盧束の如し。

更に相転じて依るが故に、衆生と言う。」

衆生とは、この世の構成要素が合わさりあってあるものをいう。

・『法華文句』

「三義有り。(中略)三つには五道流転に約す、衆多生死を受くるが故に。」

地獄、餓鬼、畜生、人、天の世界を流転するもの。迷い苦を受けるもの。

③大乘家の釈。『不増不減経』に拠る。

大乘の人たちがいう衆生とは『不増不減経』に「衆生というのは、生ぜず滅せずという意味である」といわれているようなものである。

・『不増不減経』は大正蔵卷十六所収。「不可思議清浄法界を説いて衆生と名づく。所以は何ん。衆生というは、即ち是れ不生不滅・常恒・清浄・不変・帰依・不可思議清浄法界の異名なり。是の義を以ての故に、我れ彼の法に依って説いて衆生と名づく。」

【参照】

○夜晃先生『論註講義ノート』の転写

・大乘家

「無生無滅はこれ衆生の義なり」不可思議清浄法界の異名

・『不増不減経』

「不可思議清浄法界を説いて衆生と名づく。所以は何ん。衆生というは、即ち是れ不生不滅・常恒・清浄・不変・帰依・不可思議清浄法界の異名なり。是の義を以ての故に、我れ彼の法に依って説いて衆生と名づく。」

・『大智度論』

「世諦の為の故に、衆生有と説き、第一義諦の為の故に衆生無所有と説く。」世諦とは、迷いの心において認められるような差別的境界のこと。俗諦ともいう。

第一義諦とは、すぐれたさとり智慧を究めた境地のこと。真諦ともいう。

小乗家は俗諦に偏執して、諸法因縁生の根本たる不生不滅の義を単なる空理として仏意を失うのである。

○梯實圓師の講義録（佐々木忠義先生より提供）

大乘家では衆生は凡聖通じて衆生といえる。『不増不減経』は如来蔵思想を

説いた一番早い時期のもの。もう少し前に『如来藏経』。これをまとめたものが大乘の『涅槃経』の前半部分。そして『曇鸞経』、これらが如来藏経典。  
 ・これらをまとめたものが『究竟一乘宝章論』↓大乘の『涅槃経』後半部分は、更に思想を展開させ如来藏思想が大成されている。後半部分は「現病品」「梵行品」「迦葉品」とか一闡提成仏を言う周辺です。  
 ・『涅槃経』は長い間かかって編集され、特に一闡提が成仏できるか否かに悪戦苦闘している。人間はどうしても仏に成れない者もあるのではないか、それでも一切衆生は仏になることを言い続ける。・・それでも仏教は究極的に一切衆生が救われる。未来永劫かけて一切が救われる、その根底は如来藏思想。このことを述べたのが『不増不減経』。  
 ・如来像はその徳は仏になっても増すことなく、煩惱具足であってもその徳は減ることが無い。如来は永遠であることは一切の衆生は本来、如来たるものであると言いつ切る。

#### ④曇鸞の解釈

どうして衆生が不生不滅であると言えるかといえば、もし生ずるといふことがあれば、生じおわってまた生ずることになって、いつまでも無限にくりかえすという矛盾がおこるからであり、そうすれば生ぜずして生ずるといふ矛盾があるからである。だから生ということはないのである。もし生があれば滅がある。すでに生がない以上、どうして滅がありえようか。だから生ずることなく滅することなし、ということが衆生の根本義である。

【参照】無生の理について。

○夜晃先生『論註講義ノート』の転写

「何故に衆生の名が不生不滅であるか。

如来は、その知見、微妙寂絶にして、實際動ぜずして、諸法を建立して諸法を壊せずして、而も実相を説く。

小乗の如きは、其実相を知らずして、偏に假名に執す。故にその偏執は、唯実相を知らざるのみならず、假名亦失う。

俗諦に在っては、現に是生死なるも、是れ因縁生にして假名なれば、生の当体は無自性なり。自性無きが故に、是れ畢竟空である。畢竟空なるが故に、生死不可得である。生死不可得なるが故に、謂て不生不滅といふ。

衆生は即ち是れ法身であつて、衆生如、仏菩薩如を一如にして二如なし。所以に、仏菩薩を名けて衆生と曰ふ。」

どうして衆生の名が不生不滅なのだろうか。

如来の知見（智慧によって見そなわすところ）は微妙（はかりしれぬほど深くみごとく）寂絶（静まっているの）であり、實際（真理の境地）は動ぜずして、諸法（諸宗の教え、小大乘の教え）を建立して諸法（その教え）を壊せずして、しかも実相（真實の本性、平等の實在、常住不変の理法）を説く。

小乗の釈は、如来の実相を知らないから、偏に仮名（名ばかりで実体のないもの）に執られるのである。だからその偏執は、唯実相を知らざるのみでなく、假名も亦失うのである。

俗諦に在っては、現に生死（迷い）なるも、是れは因縁の生にして仮名なれば、生の当体（ありのままの本性）は無自性（実体をもたないもの）である。実体をもたないから、畢竟空（究極絶対の空）である。究極絶対の空なるが故に、生死不可得（その迷いも知覚されえないの）である。生死不可得（迷いがまったくないの）だから、不生不滅という。

（不生不滅の二義。一には常住、二には絶対的主体性。ひとつには生じないから滅することもない時間的ないのちのはたらきをいう。ふたつには不は人間の認識を超えた絶対の意味で、絶対的主体性の意である。）

衆生というのは即ち法身であって、衆生そのものと仏菩薩そのものは一如にして二如なしである。このような所以で、仏菩薩を名づけて衆生というのである。

#### ○梯實圓師の講義録

「大乘家にいふところの衆生とは、「不増不滅経」にのたまふが」とし。「衆生といふはすなはちこれ不生不滅の義なり」と。なにをもつてのゆゑに。もし生あらば生じをはりてまた生じ、無窮の過あるがゆゑに、不生にして生ずる過あるがゆゑなり。このゆゑに無生なり。もし生あらば滅あるべし。すでに生なし。なんぞ滅あることを得ん。このゆゑに無生無滅はこれ衆生の義なり。」

・『中論』が念頭にある。存在を生と死と分節していくが、分別を超えたとき我々の考える生と死、生と滅はない。生滅は言葉としてあるのみという。衆生は本質的に不生不滅の存在、だから衆生というのは生滅を超えた無生の生。

※生は存在しないという、何故か、（四句分別。）

「生まれる」↓1、自ら生まれる 2、他から生まれる 3、自他から生まれる 4、自他でないものから生まれる この四つ以外に無い。

①自ら自らが生まれる↓これは「生まれた」とはいわない。

②他から自が生まれる↓石から人間は生まれぬ。

③自他から自が生まれる↓自でもあり、他でもあるものから自が生れる。これは自から生れる①と、他から生まれる②の誤りを犯している。

④自他でないものから自が生まれる↓自でも他でもないものから自が生まれる。そんなものは存在しない。存在しない者から生まれることはない。

・要は、人間の概念思考は存在の実体にそぐわない。物の有り方を抽象化し、言葉を作り、言葉により考えた虚構の世界に生きていることを言う為の論法。

・衆生という事について大変理解の難しい文章がでていますが、それには二つあって、一つは「不増不滅経」、二つでは迷っている状態でそのまま如来蔵であるという。迷いそのままに如来の胎児であるということをや云う。そ

うところから衆生というのは不増不減のままに衆生である。衆生の生とは、生死とか生滅とかは実体的なものとして捉えてはならない、「これを云うために中論の論理を用いるのですが、中論で生が不生であることを云うのに、分別的論理を混乱におとすために用いる論法によって、生とは不生であると論じていく。これが四句分別です。

・「生」というのは「未だ生じていないものから生ずる」のか、「すでに生じているものから生ずるのか」、「すでに生じ終わったものから生ずるのか」のどちらかだ。

「未だ生じていないものから生ずる」、「まだまだ生じていないものから生ずる」、まだ生じていないものは生まれていないのだから、未だ生じていないものから生ずる、というのは無から有が生じることになる。無から有が生ずることになるから、それはあり得ない。

「生じているものから生ずる」とは「生じているもの」から生ずる必要はないのだから、生じることとはあり得ない。

「すでに生じているものから生じる」、生ずるものから生ずることもありえない。「既に生じ終わったものから生じる」これも生ずることを二回繰り返すだけの事であり、それもあり得ない。

「未生が生になる」ということになる、未来と現在が同時になる。「已生と生が同時になると現実と過去が同時的になってしまふ。したがって時間を混乱させる。したがって「生」とは不生である。こういう論理を使っているわけです。これは時間的に「生」を見ている。

・「四句分別」の方は「何かから生ずる」ということ、そして「未だ生じていないもの」から生ずることもあり得ない。だから、どちらから見ても「生じる」ということはあり得ない。我々が考えているような「生」というものは存在しない。

・我々が考えているような生とか滅とか、生があり得ないのならば生の反対概念である滅もありえない、ということ。「不生不滅」という『中論』の八不中道には、そういうことを述べています。

・未だ生じていないものから生じることになると、生のないものから生がある、つまり無から有が生じたことになる。だからあり得ないし、生じているものから生ずるのだったら、生ずるということが成立しない。そういう論で言っているわけです。

・いずれにしても我々が「自明の事」としている生とか死ということが概念的に虚構したものであって、突き詰めていくと実体のないものだ、というのが『中論』と『不増不減経』を使いながら、こういう言い方をされたのだろうと思います。

・大変難しい言い方ですが、要するに「生とは無生の生」だというわけです。そういうことで衆生という言葉をもって、仏・菩薩と表すことも可能なのだ、ということ論証したわけです。

## ⑤ 維摩經の意を論拠とする。

たとえば『経』（維摩經）に、「五蘊（色・受・想・行・識）は空であつて固定して存在するものはないと通達すれば、そのままが衆生の根本義である」といわれているのはこの類である。

・五蘊 われわれの存在を五つの構成要素の集まりで示したものの。

色…身体および物質

受…感覚、単純感情

想…表象作用

行…意思、衝動的欲求

識…認識作用、識別、区別して知ること

## 【まとめ】

この衆生名義の段は、後の仏・菩薩莊嚴功德の意義を総じて明かしておられるのだと思います。要点でいえば、衆生と聞けば、一切衆生とか苦悩の有情とか、凡夫、迷いの存在であることばかりが思われるのですが、ここでは、言葉には無量の意味があるのだと押さえられてあります。それによって、固定観念が破られるということがあるでしょう。『不増不減経』には、「衆生というは、即ち是れ不生不滅・常恒・清浄・不変・帰依・不可思議清浄法界の異名なり。」と説かれ、衆生とは不生不滅と清浄だけでなく、他にも常恒とも不変とも帰依とも不可思議清浄法界とも名づけられてあります。最後の不可思議清浄法界でいえば、不可思議、人間の思いを超えたものとして仏・菩薩の功德が説かれてあるのでしょうか。ここからみれば、①の座功德は、『観経』の第七華座観において、ことごとまかく蓮華座が説かれますが、これも人間の思いの延長にあるものではなく、無量、計り知れないものとしての座として述べられてあるのだと思います。

計り知れない、とらわれを超えたものが衆生である。それを『維摩経』の説で結論づけておられるのだと思います。

## 【感想】

曇鸞大師は「無生無滅はこれ衆生の義なり。」と述べられて、いわば、いちというものは、私が考えているような小さく限定されたものではなく、計り知れないもの、尊ぶべきもの、仰ぎみるべきもの、私の思いを超えたものとして示されたのだと思います。

そして、その衆生、大いなるいのちというものの義、ものから、おはたらきということを通じておられるのだと思います。具体的には仏莊嚴では八種です。私の担当は①の座功德と②の身業功德ですが、身業といえば身口意の三業です。『論註』巻下には、「凡夫の衆生は、身口意の三業をして以て罪を造りて三界に輪転して窮まり已（や）むこと有ること無けん。是の故に、諸仏菩薩、身口意の三業を莊嚴して、用（も）て衆生の虚誑（「おう）の三業を治するなり。」とあります。そうして三業それぞれに、凡夫の問題と、それに応じてお

られる阿弥陀如来の功德が述べられています。

仏・菩薩も衆生、凡夫も衆生。このことを、今までお聞かせいただいたことから考えてみますと、仏という衆生は、凡夫という衆生を内包してくださり、或いは凡夫の身口意の内に内在なさっておられる。だから決して離れず、見捨てずと、まことにお粗末な私に、完成された功德を廻向してくださいとある。

「如来の作願をたづぬれば 苦悩の有情をすてずして 回向を首としたまひて 大悲心をば成就せり」正像末和讃 島地聖典二一三五

仏は、私を苦悩の有情とお見抜きになり、虚誑（こおう）・いつわりの姿を知らせ、真実の功德を与えたもうことを首〓いのちとなさっておられる。念仏催すこととございます。南無阿弥陀佛…。

### ◆座 功德の詳細

1、論偈を挙げる。

無量大宝王、微妙の浄花台にあります。

#### 【詳細】

○夜晃先生『論註講義ノート』参照

・「無量」とは大を明かす。計量すべからざることという。  
・『観経』に、臺上の一幢（いちどう）を況するに百千万億須弥山を以ってするが

如きの故に、これを「大」という。

・摩尼等を以って飾られる故に「宝」という。

・余の衆華に揀（えら）んで「王」という。

『観経』には、「大宝蓮華王座」とある。

・清浄を「微妙」の体となす。

法性の妙有は、最極微細にして、唯仏の知見である。

故に「微」といふ。

「妙」とは、能く衆生を開悟す。

二利円満することを「微妙」という。

「座」は、華に非ずして而も華なり「微」という。

「座」能く開悟するを「妙」という。

「浄華」とは、正覚の報にて自性に諸の塵垢を離れる故に浄華という。

「臺」とは、浄華の中心を座となす。

「座」は、依持を義となす。

又寂靜不動の義、

又安穩の義、

仏は蓮華を以って座とす。

『観経』に言わく。「如此妙華是本法蔵比丘願力所成」

此座は本願に報いて成ず。  
本願は本是れ生仏一体である。  
されば、仏の所座は衆生所座なり。

## 2、功德の名を標す

この二句は莊嚴座功德成就と名づける。

## 3、この功德の起由（起こされた理由）を明かす。

阿弥陀仏が因位の（法蔵菩薩であった）時、なぜこの座を莊嚴されたのだろうか。

## ①草の座の問題

ある菩薩を見られるのに、まよいの身を解脱する最後のとき、草を敷いて坐り、無上のさとりを成ぜられたが、人天はこれを見ることによって、仏をいよいよ尊くあおぐ信、いよいよ深くうやまう心、ますます法を愛樂する気持、さらに一そう修行にはげむ心を、かならずしもおこさなかった。

## ○梯實圓師の講義録（佐々木忠義先生より提供）

・これはお釈迦様のことです。最後の身とは菩薩としての最期身のこと。つまり等覺の菩薩が金剛喻定に入って、金剛智を発して根本無明を断じてさとりを開く、その最後のとき、菩提樹下の金剛法座に座られるが、その時は草を敷いてお座りになっていた。そして阿耨多羅三藐三菩提を成就されたわけです。

・阿耨多羅三藐三菩提 無上正遍道 無上の真理をさとした智慧のこと。

・その仏様を拝見した人や神々も、信や恭敬や愛樂や修行が増上することがなかった。

## ②能く願を選ばれる

だから私が仏となるときには、無量の大宝王たる微妙の浄花の台をもって仏座としようと、とくに願われたのである。

## ○美濃部薫一師の『浄土論註に聞く』第二巻より抜粋。

「何となれば、この浄華台なる仏座は、淤泥華であるというところに、私ども衆生の煩惱のなから開かれたという深いつながりがあるからである。

曇鸞大師は、浄土の聖衆は正覺の華より化生すると表わし、そこに華座は主伴一如平等の自覺を語らんとしておられるのである。（中略）

ともあれ、私どもはこの華座に於て浄土に触れ、仏を見たてまつることができる。私ども凡夫は、淤泥の煩惱の自覺に於て華座に触れる。仏はまた、淤泥の中から生まれた華座に立ち給う。仏と衆生とは、その体はまさしく仏凡一体である。衆生は淤泥の宿業のめざめによって南無の関門をくぐる。衆生が南無歸念の一念に立つところに、この華座に於て阿弥陀仏が現在し給うものであ

る。

まことに浄土の座功德は、私どもの淤泥即ち宿業の大地に根をおろして下さっている。」

4、文を註釈するのに二つある。

①無量について『観経』第七華座観を引用する。

「無量」という意義は、『観無量寿経』（第七華座観）に説かれている如くである。「七宝の地上に蓮花の大王ともいふべき大宝座がある。その蓮花の一一の花べんには百宝の色をあやなし、そのなかに八万四千の脈があつて、あたかも自然の（妙をきわめた）絵とかわらない。一一の脈には八万四千の光があり、小さな花べんでもさしわたし二百五十由旬ある。このような花べんが八万四千まい、かさなつており、その一一の花べんの間に百億のもつともすぐれたマニ珠がちりばめられて、たがいに、きらめき、よそおいあつてゐる。一一のマニ珠は千の光明を放ち、その光はおのずから七宝をかたちづくる、きぬがさとなつて地上をあまねくおおつてゐる。またその台は釈迦ビリヨウガ宝でかざられ、この蓮花の台は八万の金剛石・ケンシユクガ宝・浄マニ宝珠・妙真珠の網などでかざられている。その台の上には、自然に四つの宝幢が立ち、一一の法幢はあたかも八万四千億の須弥山のように威容をきわめてゐる。幢の上に、はりまわされた宝の幔幕は夜摩天宮のように、五百億の微妙なる宝珠がちりばめられて、きらめきあつてゐる。その一一の宝珠には八万四千の光があり、一一の光は八万四千種のくさぐさの金色をなし、その一一の金色の光が安楽国の宝土をあまねくおおつて、いたるところに変化してゐる。いろいろふしぎな相をあらわしてゐる。あるいは金剛石の台となり、あるいは真珠の網となり、いろとりどりの花の雲となり、十方にわたつて意のままに変現し、仏の教化、衆生の利益をめぐらしてゐるのである」と。

②『観経』第七華座観の意を釈す。

このようなことからは数量という考えを、こえたものである。

5、結語

だから「無量大宝王、微妙の浄花台にいます。」とのたまわれたのである。

【感想】

数量という考えをこえたものという一文が響きます。私の人生は計算です。あれこれ計つて、ああすればこうなるはず、こうすれば…と、とにかく計らう日々です。つまり自分の考えが根本なのです。この自己中心の思いこそが、仏を仰ぐ信云々の歩みを台無しにしてゆくのでしょうか。

華座の功德は、法蔵菩薩の願心のあらわれであると思ひます。それは、仏を仰がないものに、仏をいよいよ尊くあおぐ信を与え、敬い心のないものに、いよいよ深くうやまう心をおこさせ、法に背くものに、ますます法を愛樂する気

持ちを芽生えさせ、傲慢のものに、一生相続、さらに一そう修行にはげむ心を与えたいということでありましょう。

#### ◆身業 功德の詳細

1、論偈を挙げる。

相好の光一尋なり、色像、群生に超えたまえり。

2、功德の名を標する

この二句は莊嚴身業功德成就と名づける。

○ここから正しく蓮華座にお坐りなる阿弥陀仏の功德を明かします。三業の内  
の身業を分けて、まずその功德を示します。

○夜晃先生『論註講義ノート』参照

・相好とは

仏の身体に具わっている立派な特徴である三十二相八十随形好をいう。

智度論二十九に云く。

『相大嚴身。若説大者、則已撰小。復次相麤而好細。衆生見仏、好則難見  
故。』

又相者、余人共得 好者或共或不共。以是故 相好別説』

「相とは大にして身嚴かなり。若し大と説かば、則ち已に小なるを撰す。

復次に相とは麤にして好とは細なり。

衆生、仏を見たてまつるに、好は則ち見ること難きが故に。

又、相は、余人共に得るなり、好は或は共にし或は共ならず。

是を以ての故に、相と好を別に説けるなり。」

徳を表するを相と名づけ、情に愜(かな)ふを好と名く。

「愜(キヨウ、ニころよい) 快志満」

大小麤細の別なり。

相と好は、それぞれ大と小、麤と細の別に説かれる。

色像 相好を総じて言ふ。

身業 諸徳集成するを身と名づけ、身に業用するを業と云ふ。

3、この功德の起由を明かす。

仏は因位の時、なぜこのような身業を莊嚴されたのだろうか。

(1) 甚不超越の問題

① 身光の問題

応化身の受一丈光(智論四、丈光相、四辺皆有一丈光)にして、劫初の人身  
光に甚だ超絶せず。

ある仏の身を見られるのに、一丈の光明をはなっているだけで、人身の光とあまりかけはなれていないのである。

## ②色像の問題

又、色像群生に超絶せずして転輪聖王に同じ。

○夜晃先生『論註講義ノート』参照  
智度論七

「問云。転輪聖王有三十二相。菩薩亦有三十二相。有何差別。

答。菩薩相者、有七事勝。」

「問うて云わく。転輪聖王、三十二相有り。菩薩亦三十二相有り。何らの差別有るや。答う。菩薩の相は、七事の勝有り。」

・提婆等、所減一、（一本に二作る。二を是とす）

智度論八十八

「提婆達多有三十相、無三十二。転輪聖王雖有三十二、無威徳。不具足不得処与愛等煩惱俱。」

「提婆達多、三十相有りて、三十二無し。転輪聖王、三十二有りと雖も、威徳無し。具足せず処を得ず。愛等煩惱と俱なり。」

大地の上に於いては、尊きもの聖なるものと雖も、不甚超絶、これなるが故に、愚かなるものは、尊きもの聖なるものを軽侮（けいぶ）して、罪悪を深めるのである。

世尊と提婆も、その身相に於いてはあまりに違（ちが）いはなかった。その為に、王舎城の悲劇ははじめた。（観経発起序。涅槃経。智論十四。）

たとえば転輪王の相好のようなもので、かの提婆達多はそれにくらべてわずかに劣るだけで、一見したところは大体かわりがない。ただ一つの相好が少ないだけである。そのため阿闍世王はあやまって争乱の心を懐いたのである。

「提婆達多の（相の）減ずるところ」にふたつの説がある。ひとつは「減一」で、眉間の白毫相が欠けていたとする説である。ふたつには「減二」で、足の裏の千輻輪相と眉間の白毫相の二つが欠けていたとする説である。通会すれば、足の裏は見えにくいので、一見すれば欠けているのは白毫相だけである。しかし、根本的な問題は、千輻輪相が欠けていることに起因するのである。

・千輻輪相

足下二輪相、足下千輻輪相ともいう。

『大般若経』「足の下に千輻輪の文あり、網轂（もうこく）の衆相円満せずと  
いうことなし。」

網は輓の事で、車輪の外周をつつむタガ。轂は車輪の中央部。

『観念法門』「二の足の下平らかにして千輻輪相あり。輻輓（ふくもう）具足

し、みな光明ありて、あまねく十方の刹を照らす。」 輻はスポーク。

この相は、仏の説法があらゆる煩惱を打ち破ることを意味します。初転法輪によって、誤った六人の行者を悟りへと導かれた功德などを表し、法輪が通りすぎるとその跡には清らかな蓮の華が咲くといわれます。

・又、刪闍耶外道等が、(陀羅尼集經) 牛車にむかふ蠶螂の如き、自ら量らずして軽々しく、仏に敵(あだ)なしたのである。

蠶螂の譬は、莊子の人間世に云く。「汝不知夫蠶螂等」と書かれてある。汝は蠶螂を知らざるか。其の臂(うで)を怒(ふりあ)げて以て車の轍(わ)に当(むか)う。其の任(ちから)に勝(た)えざることを知らざるなり。

然るに、応身かくの如くなすによって、仏本願をおこしてその身業を成就すと云ふ。如何に解すべきであるか。蓋し、凡眼を以ってする限り、応身は人天に超絶せず、報身は『色像群生に超』えたものである。

応身は人天を救はんが為の応身であり、報身は一切衆生の自覚に内在せんとする願行具足の報身である。闍王「阿闍世王」、提婆、六師外道等は、世尊の内的尊嚴を知らぬものである。それ故に蠶螂の類と言われるのである。彼等はその内面に真智を成就せぬものである。

真智成就して、本仏の身業超絶を知らば、彼等は愕然として覚めるであろう。

応身は報身を指すにある。報身を知らずして応身のみを見るものは、真実には、応身すら知らないで、「乱を懐き」「蠶螂の如く」するであろう。

## (2) 能く願を選ばれる

この故にかくのごとき身業を莊嚴したまへり。

### 4、疑問を解決する。

#### ① 仏の一尋が六尺であるはずがない。

中国の古くからの教えによれば、六尺を一尋という。(真身観)では「阿彌陀如来の身の高さは六十万億那由他恒河沙由旬である。仏の円光は百億の三千大千世界のようである」といわれている。翻訳者が一尋ということでは仏の相好の光をあらわしているのはどうもしっくり合っているとはいえないようである。

#### ② ここは尺ではなく、里人の習慣に拠ったと解釈する。

数もかぞえられぬ里人たちは、縦横・長短をはつきりさせえず、みな一様に横に両手のひじをのびした長さを一尋といっている。翻訳者はこの(素朴な人々をすくう妙なるみ教えの)意味をもって阿彌陀如来が精いっぱい、のびされた両ひじの大きさとして、あらわしたものとおもわれる。だから一尋といえ(如来の両手をのびされた長さであり、それは大体系の高さと同じであるから)円光もまた直径六十万億那由他恒河沙由旬であるはずである。

○夜晃先生『論註講義ノート』抜粋

鸞師は、訳者は里舎間人、即ち在所の人が通俗に、両手を舒べて尋(ひろ)と云ふに順じて、如来両手を舒べたまふを一尋とせるものと通釈せられる。誠に、大賢の巧釈と言ふべきである。かくとらない以上、色像超群生が句の説きやうがない。

5、結語

だから「相好の光一尋なり、色像、群生に超えたまえり」とのたまわれたのである

6、問答。『観経』をもって、身業功德を更に訪ねる。

○夜晃先生『論註講義ノート』抜粋

茲に相好色像の義に因みて、観経像観の文を出されたるは、唯心自性の誤謬(ごびゆう)を簡んで、指方立相の宗義を明らかにせんとせられるのである。聖道諸師の浄土門に於ける誤解は、主として像観の説に胚胎す。

終南の釈明に、この意を見る。鸞師の時代、已に萌芽あり。故にこの通釈あり。

曇鸞註解の文に「五には唯是れ自力にして他力の持つ無し」とある等、当時の時代思潮知るべきである。

(1) 問い

『観経』にいわれている。

「諸仏如来は法界身である。(だから)すべての衆生の心の想いのなかに入る。

だから汝らが心に仏を想うとき、この心がそのまま三十二相八十随形好である。

この心が仏となるのであり、この心がそのまま仏である。

諸仏正遍知海は衆生の心想より生ずる」と。

この意味はどのようなものであるか。

(2) 答え

① 法界身心に入るを釈す。

身は集めて成立する意味に名づける。界は事物の別々の相に名づける。

たとえば、眼界が眼根・その対境・空間・明るさ・意志という五つの因縁より生ずるようなものである。この場合、眼はただ眼自身の因縁を行ずるだけであり、他の因縁にはかかわらない。それがつまり事物が別であるという意味である。耳・鼻などの界もまたこのようなものである。

○夜晃先生『論註講義ノート』抜粋

『法界身に入るを釈する』に当って先ず、『身界』を釈せられる。

『身を集成と名づけ、界を事別と名づく』『身の字を丸囲み』

・身集成『唯識』十に云く。

「体、依、聚、義総説名身」「体、依、聚の義、総じて説きて身と名く」

〔聚の字を丸囲み〕

『大乘義章』廿本に云く。

「身者是体、此五仏体。故名為身。又德聚積亦名為身」「身とは是れ体なり、此れ五仏体なり。故に名づけて身と為す。又、德聚積するも亦名づけて身と為す」

今は即ち『聚』の義である。衆生身の如きは、五陰が積集して成就す。

仏身亦然り。無漏の五蘊が積集して成ずる所なり。

・界。

如眼界より例を引て釈す。

『俱舍』に云く。

「法種族義是界義。如一山中有多綱鐵金銀等族、説名為界。

如是一身、或一相続。有十八類諸法種族、名十八界 止

有説界声表種類義、謂十八法。種類自性各別不同、名十八界。」

『法界次第』五に云く。

「通明界者、以界別、為義。此十八法。各有別体。義無渾濫、故通受界名

也」

・界は種別を云ふ。〓差別した物〓。

・眼界縁とは、眼識界発生の縁をいふ。

眼根と、色境と、虚空と、光明と作意と、此五法を具して能く眼識を發

す。

これを「生」となす。

親しく自ら生ずるに非ず。眼が但已縁を行じて他の声香等を行ぜざるは、

界

別するが故なり。故に是眼等といふ。耳鼻舌等通じて余界を知らしむ。

②正しく經文を釈す。

・法界の二字を釈す。

諸仏如来は是れ法界身なりと言ふは、法界は是れ衆生の心法なり。心能く世間・出世間の一切諸法を生ずるを以ての故に、心を名けて法界と為す。

・是法界身を釈す。

法界は能く諸の如来の相好の身を生ず。亦色等の能く眼識を生ずるが如し。

この故に仏身を法界身と名く。

・入衆生心を釈す。

是の身、他縁を行ぜず。是の故に、一切衆生の心想のうちに入るとなり。

・法界

一切衆生の意識作用

法界とは衆生の心法のことである。

何故ならば『心能く世間出世間の一切諸法を生ずるを以つての故』にである。

心を以つて法界とする。これは、心の所生を以つて還つて能生の心に名づけて心を法界としたのである。

「上部の書き込み…意識作用が迷ひの世界も悟りの世界も一切の事□□を、観わけるが故に法界と云ふ。」

・法界身

法界即ち衆生の心想が如来相好身を生ず。「生ず〓観る」

即ち心所生の身を法界身と名づける。

亦色等能く眼識を生ずるが如しとは、例に今する也。

『定善義』に云く。

「法界と言ふは是れ所化之境、即ち衆生界なり。身と言ふは是れ能化之身、即ち諸仏の身なり。」

善導の意は、衆生（法界）に赴くの身を法界（衆生）身（仏身）となす也。鸞師の意は、法界所生の身と為す。

異と謂ふべし。されど、聖道等の諸師が、法界を釈して理法界となすに、揀ぶ点は同一であるが故に、相妨げず。

鸞師は、発生的に説き、善導は救済の大用認識の上より説けるものである。

・入衆生心

是身他縁を行ぜず

他縁を行ぜずとは、衆生が心に仏を念じ、仏身衆生心を捨てざるが故である。

『原要』に云く。

「法界能く如来を生ずるに自ら二義あり。

一に本縁に約す。謂く如来は、本衆生の心法を縁じて大悲の願を興して、此法身を成ず。衆生の無明心が仏の大悲を撃発するは、義は能生の如し。

二に現修に約す。謂く因縁時至り、感應道交り衆生が心に仏を念ず。仏大悲身来りて心中に現ず。龍樹の若人願作仏成時為現身といふが如きは今と義同じ。

念に由つて現ずるが故に、義は能生の如し。』

後義を是とす。次の文あるが故に。

存覚浄土見聞集参照

② 心相即相好を釈す。

① 牒釈

心に仏を想ふ時、是の心即ち是れ三十二相八十随形好なりといふは、当に衆

生の心に仏を想ふ時、仏身の相好、衆生の心中に顯現するなり。

## ② 喩顯

淨信 色身 顯現 能所別 一体  
譬へば水清ければ則ち色像現ず、水と像と一ならず、異ならざるが如し。

## ③ 結釈

故に仏の相好の身即ち是れ心想と言へるなり。

・ 上は仏が機に應じたまふ徳に約し、此は衆生能觀の相に約す。

・ 「心に仏を想ふ時、是の心即ち是れ三十二相八十随形好といふは」「当に衆生仏を想ふ時、仏身の相好、衆生の心の中に顯現するなり。」

「想仏」とは觀想に約して言ふ。初起後続何れにても好し。

仏身相好とは、是心即是等の文意。

相好とは、色身に約して言ふ。定善義には、三無障礙に約して言ふ。

〔定善義の像觀…「法界」といふは三義あり。〕

一には心遍するがゆゑに法界を解す。

二には身遍するがゆゑに法界を解す。

三には障礙なきがゆゑに法界を解す。〕

〔論註下巻、利行満足章…「遍」に二種あり。〕

一には聖心あまねく一切の法を知ろしめす。

二には法身あまねく法界に満つ。もしは身、もしは心、遍せざるはなし。〕

心想が即ち仏なることを言ふも、唯心所變の謂に非ず。但是れ心境相應の義である。

・ 喩。水清とは衆生の想仏、即ち淨信心である。

・ 色像現とは、仏の相好身が衆生心中に顯現するに喩ふ。

・ 不一不異。即是の義を形はす。能所別なり故に不一、相應一体故に不異といふ。

故に、仏身の相好即ち是れ心想と云ふのである。

## ③ 心作仏是仏を釈す。

### ① 牒釈

是の心作仏と言ふところは、心能く作仏するなり。是の心是れ仏といふは、心の外に仏無きたもうなり。

### ② 喩顯

・ 總 心が仏身を出すを謂ふ 仏身が心に依るを謂ふ

・ 譬へば火は木より出でて、火、木を離るることを得ざるなり。

・ 別

木を離れざるを以ての故に則ち能く木を焼く。木、火のために焼かれて、木

即ち火と為るが如し。

「心外無仏」

「ページ上部…是心作仏等。信巻引用。六要鈔に「凡心及びたる仏心の不一不異の義を顕す」より仏凡一体論盛におこる。聖道諸師、理観とし、弥陀の理法身と釈等の理法身とは一つであり、是心とは、衆生能観の心、作仏は、能観の心のうへに、所観の仏身現はれる。是心是仏とは、所観の仏、能観の心と一つになり、能観の心そのままが仏也とする即ち衆生そのものが仏となる。」

・是心作仏といふところは『心能く作仏するなり』と、これ修観を以ってこれを云ふ。諸師が観仏の心成仏すると解するとは大いに異なり。  
『定善義』に「是心作仏といふは、」自の信心に依りて相を縁するは作の如し。」と、この意なり。

・心外無仏。所縁の境の仏が、能縁の衆生心に入れば、即ち心外に境なきが故に、心の外に仏ましまさずと云ふ。  
定善義に、

「是心是仏といふは、」心能く仏を想へば、想に依りて仏身現す。即ち是の心仏なり。是の心を離れて外に更に異仏無ければなり。」  
他師の唯心の釈と義の別なることを見るべし。

・譬。木||心  
火||仏

仏身心に依る

「総1 心作仏是仏 仏 心

仏 心

心仏身より出す」||「火、木より出でて」「火、木を離れず。」仏「○囲み」

「別2 心能作仏 心 心

仏身心に□す」||木を離れざるを以ての故に則ち能く木を焼く

「別3 心外無仏 心 仏 仏

木、火の為に焼れて木即ち火と為る也

□するが故に即ち…「薄字で読めない」

信書類に一念□□釈に今文を引く「12-84」。生仏不二の趣旨を示す也。  
(典八四)

「ページ上部…善導の事観

定善義の説

是心作仏

是心是仏

宗祖の意

(4) 智海従心生を釈す

① 正遍知を釈す

諸仏正遍知海は心想より生ずといふは、正遍知とは真正に法界の如くにして知るなり。法界は無相なるが故に諸仏は無知なり。無知を以ての故に知らざるはなし。無知にして知る者、是れ正遍知なり。

② 海を釈す

是に知んぬ、深広にして測量すべからずが故に海に譬ふるなり。

・ 正 〓 真正

遍知 〓 如法界而知

云何が真正なる。法界の如くなるが故に。

法界とは何ぞ。諸法実相、是れなり。

下の浄入願心釈中にも、「実相無相故真智無知也」又利行満足の釈中にも「法性無相故聖智無知也」

如法界とは、次に釈して「法界無相諸仏無知也」、これ即ち無分別智なり。

中道の境の如くなる、是れ真正の義

無相とは仮名相を離する也。即ち中道の境を法性無相と言ふ。

下の浄入願心の註には、無相故能無不相と知るべし。諸法是実相なり。

無知 〓 真実智慧

実相の境の如く、分別する所無きを謂ふ。

境智如如なるが故なり。

以無知故無不知也 正即ち徧の義を釈す。

有所得の智は、実相の境の如くならず、故に知らざる所あり。

無分別智は、法界の如くなるが故に、徧く一切法を知る。境が無相にして定性なければ、亦能く相ならざるなし。智既に無知にして徧執なければ、亦能く知らざるなし。

「無知にして知る者、是れ正徧知也」

名義を結成す。真実の智慧、即ち是れ正徧知である。

海。是に知んぬ、深広にして測量すべからずが故に海に譬ふるなり。

『大経』に言く。

『如来智慧海深広無涯底』

正の故に深と称し

徧の故に広と言ふ

『観経』には、

『諸仏正徧知海從心想生』と云ふ。  
今は略して説かず。義は前に同じ。

・料簡

光一尋を釈するに觀經の真身觀の文を引かれた。然るに真身觀の仏は、聖人は、化身とせられた。今引ひて論の色像に同するは如何。

終南は判じて是報非化と曰ひ、第十八の本願に酬報するものと為す。然るに上人がこれを化身と判ぜられるは、未熟の機の觀見する辺に約する故なり。『教行信証大意』の釈の如し。

鸞師は直ちに真報身となす。下の身業功德の釈の如し。

人あつて今の釈をもて化に寄するとなすものは、光一尋と云ひ、六十万億那由他恒恒河沙由旬と言ふ數量の説あるに泥むより来る説なり。

然れども仏身は清淨にして、染碍を離る。喩へば虚空の如し。長短方円大小多少、終に不可得。而れども、これを説くには必ず方あり。未だ嘗て數量に依らずんばあらず。八万四千と云ひ、六十万億、百億三千世界と云ひ、身光一尋と云ふ。皆是れ一途の數量なり。而れども此數量は則ち非數量で周遍ならざるものなり。故に満虚空中と云ふも大と為すに足らず、丈六八尺と云ふも亦何ぞ卑しめん。若し夫れ量と無量とを以つて真仮を分別するものは、且く増勝に約するの説のみ。大小必ず真仮ならず。須く意を得て解すべし。今釈は勿論真實義にして化身に非ず。

【まとめ】

・『觀經』2-15第九真身觀

「仏身を觀ずるを以ての故に、亦仏心を見る。仏心とは大慈悲是れなり。」

仏身とは、ここでは三十二相八十随形好という大小麤細の功德を指すのでしようが、その大本は仏心であり、觀經には大慈悲であると説かれてあります。阿弥陀仏は、この無縁の慈（慈悲そのものが本性であること）を以つて、諸々

の衆生（凡夫）を救うことを本質となさつておられると思います。

・ 仏の身業、身の業（わざ）というものが、ここでは理觀（仏を理で觀ずること）でなく事觀（具体的な相を觀ずること）、その事觀によつて示される事、私たちの目に見える相で説かれてあることが、大切かと思ひます。

はじめは仏の身光が、人に対してはなはだ壮大であることを示されます。これは、人間の思いを超えている事を示されるのでしよう。その思いを超えらるとはどういうことでしょうか。

夜晃先生の講義ノートには、上は仏が機に應じたまふ徳に約し、此は衆生能觀の相に約す。「心に仏を想ふ時、是の心即ち是れ三十二相八十随形好といふは」「当に衆生、

仏を想ふ時、仏身の相好、衆生の心の中に顯現するなり。」

仏は自らの功德をそのまま届けたいのでしよう。私たちの計らい心が雜じつた、智慧のないふるまいに対し、どこまでも凡夫を救わんがためのお姿が讃嘆なされたあるのだと思います。南無阿弥陀佛

○感謝

【意訳】『解読浄土論註』 yanadera.com 参照

【詳細】『解読浄土論註』 袁輪秀邦師

『論註講義ノート』 住岡夜晃先生

『論註に聞く』 美濃部薫一師

教師会資料（田畑正久先生、平野修先生）

梯實圓師 論註講義録（佐々木忠義先生より）

## 往生論註（上巻）総説分・観察文・器世間

## （論註）

相好の光一尋なり

色像群生に超えたまえり

此の二句は莊嚴身業功德成就と名づく。

仏本何が故ぞ此の如きの身業を莊嚴したもう有る仏身を見そなわすに、一丈の光明を受けたり。人の身光に於いて甚だ超絶せず。轉輪王の相の如し。抑も亦大きに提婆達多の減ずる所に同じ。唯一なり。阿闍世王をして茲こゝを以て乱を壊かしむることを致す。刪闍耶等を

して敢あえて蠟螂とうろうの如くす。或は此の如きの類なり。

是の故に此の如きの身業を莊嚴せり。

此の間の詰訓を案ずるに六尺を尋たずねと曰う。

觀無量壽經に言えるが如し。阿弥陀如来の身の高さ六十万億那由他恒河沙由旬なり。仏の円光は百億の三千大千世界の如し、と。訳者尋を以てして言えり。

何ぞ其れ晦くろからんや。

里舎の間の人、縦横長短を簡こまばず。咸ことごとく横

に両手の臂ひじを舒のびて尋となすと謂えり。

若し訳者或は此の類を取りて、用いて阿弥陀

## 身業功德・口業功德・心業功德・

## （現代語訳）

豊平班・河野繁典

相好の光一尋なり

色像群生に超えたまえり

此の二句は莊嚴身業功德成就と名づく。

仏はもと、なぜこのような身業を莊嚴されたかという、ある仏の身を見られるのに、一丈の光明を成就しているだけで、人身の光とあまりかけはなれていないのである。たとえば天輪王の相好のようなもので、かの提婆達多はそれにくらべてわずかに劣るだけで、一見したところは大体かわりがない。ただ一つの相好が少ないだけである。そのため阿闍世王をしてあやまって（提婆達多に帰伏するという）争乱の心を懐いだかしめたのである。サンジャヤらの外道が、かまきりのような小さなうでを積尊にふりあげたのもこのような類である。だからこのような身業を莊嚴されたのである。

この国の古くからの教えによれば、六尺を一尋という。『觀無量壽經』では「阿弥陀如来の身の高さは六十万億那由他恒河沙由旬である。仏の円光は百億の三千大千世界のようである」といわれている。訳者が一尋ということでは仏の相好の光をあらわしているのはどうしてもしっくり合っているとはいえないようである。

数もかぞえられぬ里人たちは、縦横長短の区別なく、みな一様に横に両手のひじをのびした長さを一尋といっている。訳者はあるいはこの意味をもって阿弥陀如来がせい一ぱいにのびされた両ひじの大きさとしてあらわ

如来の舒のくたもう臂ひじに准じて言わんと為なるか。  
 故に一尋と称せば円光も亦六十万億那由他恒  
 河沙由旬むたに徃むかるべし。是の故に、相好光一尋・  
 色像超群生と言えり。

。問うて言わく。観無量寿經に言わく。諸仏  
 如来は是れ法界身なり。一切衆生の心想の中  
 に入る。是の故に汝等心に仏を想う時、是の  
 心即ち是れ三十二相八十随形好なり。是の心  
 作仏す。是の心是れ仏なり。諸仏正遍知海は  
 心想従り生ず。是の義いかん云何ぞや。

答えて言わく。身を集成と名づく。界を事  
 別と名づく。眼界の根・色・空・明・作意の五  
 の因縁を縁じて生ずるを名づけて眼界と為す  
 が如し。是れ眼まなこ但ただ自おのれから己が縁を行じて、  
 他縁を行ぜず。事別なるを以  
 ての故に。耳鼻等の界も亦是の如し。

諸仏如来は法界身と言うは、法界は是れ衆生の  
 心法なり。心能く世間・出世間の一切諸法を生  
 ずるを以ての故に心を名づけて法界と為す。法  
 界能く諸の如来の相好の身を生ず。亦色等の能  
 く眼識を生ずるが如し。是の故に仏身を法界身  
 と名づく。是の身他の縁を行ぜず。是の故に一  
 切衆生の心想の中に入るとなり。

したものとおもわれる。だから一尋といえば  
 (如来の両手をのばされた長さであり、それ  
 はだいたい身の高さと同じであるから) 円光  
 もまた直径六十万億那由他恒河沙由旬である  
 はずである。だから「相好の光一尋なり、色  
 像は群生に超えたまえり」とのたまわれたの  
 である。

問い。『観無量寿經』にいわれている。「諸  
 仏如来は法界身である。(だから)すべての衆  
 生の心の想いのなかに入る。だから汝らが心  
 に仏を想うとき、この心がそのまま三十二相  
 八十随形好である。この心が仏となるのであ  
 り、この心がそのまま仏である。この心がそ  
 のまま仏である。諸仏正遍知海は衆生の心想  
 より生ずる」と。この意味はどのようなもの  
 であるか。

答え。身は諸々の要素が集まり成立するも  
 のに名づける。界は事物の別々の領域に名づ  
 ける。たとえば、眼界が眼根・その対境・空  
 間・明るさ・意志という五つの因縁より生ず  
 るようなものである。この場合、眼はただ目  
 自身の因縁を行ずるだけであって、他の因縁  
 にはかかわらない。それはつまり事物の領域  
 が別であるからである。耳・鼻などの界もま  
 たこのようなものである。

「諸仏如来は法界身である」とは、法界は  
 (さきあげた眼界などのように) 衆生の心  
 の法そのものである。心は(因縁によって)  
 よく世間・出世間のあらゆる法を生みだすか  
 ら、心を法界と名づけるのである。(それゆえ)  
 法界はまた諸々の如来の相好の身を生ずる。  
 それは色界などがよく眼識を生ずるようなも  
 のである。だから仏の身を法界身というので  
 ある。この仏の身は衆生の心法以外の他の縁  
 を行ずることはない。だから、一切の衆生の

心に仏を想う時、是の心即ち是三十二相八十随形好というは、当に衆生の心に仏を想う時、身相好衆生の心中に顕現するなり。譬えば水清ければ則ち色像現ず。水と之像と一ならず異ならざるが故に、仏の相好の身即ち是れ心想と言えるなり。

是心作仏というは、心能く作仏すと言うなり。

是心是仏というは、心の外に仏ましまさ無ざるなり。

譬えば火は木従り出てを離れることを得ざるなり。木を離れざるを以ての故に、則ち能く木を焼く。木、火と為る。木を焼いて即ち火と為るが如しとなり。諸仏正遍知海は心想従り生よずというは、正遍知は真なり正なり。

法界無相なるが故に諸仏無知なり。無知を以ての故に知らざること無きなり。無知にして知るは是れ正遍知なり。是に知んぬ。深広にして測量すべからざる故に海に譬えるなり。

心想の中に入るというのである。

「心に仏を想うとき、この心そのまま三十二相八十随形好である」とは、衆生が心に仏を想うとき、仏身の相好が衆生の心の中にあられるということである。たとえば、水が澄んでいればものの像がうつされる。水と像とは一つではないが、さりとて異なるものでもない。だから仏のすがたかたちがそのまま衆生の心の想いである、というのである。

「この心が仏となる」とは、衆生の仏を想う心が仏を作るということである。

「この心そのまま仏である」とは、この衆生の作仏心のほかに仏はましまさないとということである。

たとえば、火は木ををすりあわせること）から生じるから、火は木をはなれてはない。木を離れないから木を焼くことができ、それで木が火となるのであり、さらに木を焼いて火は火となるのである。

「諸仏正遍知海は心想より生ずる」というのは、正遍知とは真であり正であって、（衆生の心想である）法界そのままに知るのである。

法界は無相（とさとするのが諸仏の智慧）であるから、諸仏はまた無知である。無知だから知らないことがない。無知であってしかも知であるのが正遍知である。だからこそ、その智慧が深く広くはかりしることができないので海に喩えるのである。

## 如来微妙の声 梵の響き十方に聞こゆ

この二句は莊嚴口業功德成就と名づく。  
 仏本何が故ぞ此の莊嚴を興したまえる。有る  
 如来の名の尊からざるに似る。外道軼人瞿曇しやにんくどん  
 姓と称するが如し。道を成ずるに声を曰うに  
 唯梵天を徹すを見そなわす。  
 是の故に願じて言わく。我成仏せんに妙声遐  
 かに布きて聞かん者の忍を悟らしめんと。  
 是の故に、如来微妙声・梵響聞十方と言えり。

## 地水火風虚空に同じくして分別無からん

この二句は莊嚴心業功德成就と名づく。  
 仏本何が故ぞ此の莊嚴を興したもう。有る  
 如来を見そなわすに、法を説くに此は黒、此  
 は白、此れは不黒不白、下法・中法・上法・上  
 上法と云う。是の如き等の無量差別の品あり。  
 分別有るに似たり。

是の故に願じて言わく。我れ成仏せんに、  
 地の荷負するに軽重之殊無きが如く、水の潤  
 長するに菴菴しよつかつ之異無きが如く、火の成就する  
 に芳臭之別無きが如く、風の起発するに眠悟  
 之差無きが如く、空の苞樹受するに開塞かいそく之念  
 無きが如く、之を内に得て物を外に安くす。  
 虚しく往て実みちて帰るに是れ息に於いてをや。  
 是の故に、同地水家風 虚空無分別と言えり。

## 如来微妙の声 梵の響き十方に聞こゆ

この二句は莊嚴口業功德成就と名づける。  
 仏はもと、なぜこの莊嚴を興されたかとい  
 と、ある如来を見られるに、その名はかなら  
 ずしも尊ばれていないようである。たとえば  
 仏をおとしめようとすると外道が、クドンとそ  
 の姓をよびすてにして仏を軽んじている。こ  
 のように、仏が道を成じられてもその名はた  
 だ梵天にとどくばかりで（十方に聞こえない  
 ので）ある。

だから私が仏となるからには、「その妙なる  
 名声をはるか十方のはてまで、およばぬとこ  
 ろのないようにゆきわたらせ、聞く者すべて  
 をして無生法忍をさとらしめよう、と願って  
 いわれたのである。

だから「来微妙の声、梵の響き十方に聞こ  
 ゆ」といわれているのである。

## 地水火風虚空に同じくして分別無からん

この二句は莊嚴心業功德成就と名づける。  
 仏はもと、なぜこの莊嚴を興されたかとい  
 うと、ある如来を見られるのに、法を説く場  
 合、これは黒（悪）これは白（善）これは黒で  
 もなく白でもなく（無漏）、これは下法・中法・  
 上法・上上法と説く。このような無量の差別  
 の品類があつて、法それ自体に分別があるか  
 のようにうけとられる。

だから、私が仏となるからには、大地がも  
 のを荷負するのに軽・重をわけることがない  
 ように、水がものをうるおし成長させるのに  
 悪草・葉草を区別することがないように、火  
 がものを煮たきするのに芳ばしい・臭いの  
 別がないように、風がふきおこるのに眠れる  
 者と目覚めている者との差をつけないように  
 空間がものをうけられるのにまだあいてい

	る・もう一ばいだという念がないように、このように無分別の心を内に得て、衆生を外なる万差のすがたに安ぜしめ、虚心に往って真実に満たされて帰ることここにきわまるように、と願っていわれたのである。
	だから「地・水・火・風・虚空に同じくして、分別無からん」とのたもうのである。

### (私の感想)

口業に於いては、如来が覚りを成られても、外道が瞿曇（グドン）と如来の名を呼び捨てにして、軽ろんじられることに対して、その妙なる名声をはるか十方のはてまでも行きわたらせ、法を聞く者すべてに無生法忍を覚らしめようと願われた。その願いが今この私の処に届けられたことに、誠に有難い思いがいたします。

心業に於いては、大地がものを荷負するのに、軽重を分けることがない。水は全てのものを平等に潤す。火は煮炊きするのに臭いの差別がない。風は眠れるもの、目覚めているものに差をつけない。空間がまだ空いているとか、もう一杯だという念がないように、全ての衆生を平等に救うという仏の意が述べられていると思います。ここに述べられているのは仏による衆生に対しての身口意の三業であるが、聞法の衆生における、身口意の三業の中では、心が体の全てを支配しており、身の行動も口での言葉の発言も、その一番中心は心で有り、人の行動を起す元となるところで、最も重要な部分で有ると思います。

心は体のどこに有るかというと、小腸に有ると言った人がいます。脳が人の動作を指示している様に思いますが、脳は過去の体験を脳の海馬に蓄積する処であり、その蓄積されたものを引出して行動に移すのは、心が判断して身に行動を指示し、口で心の想いを伝えて行くのであり、やはり意が中心となっていることは、間違いないことで有りましょう。

天親菩薩が無量寿経を戴かれた我一心の意を、曇鸞大師において、これを深く戴かれた意であろうと思います。

## ◎ 担当箇所並びに発表資料

二〇二五年五月二三日 栗栖哲義

## 一・担当箇所

○『浄土論註』巻上 衆生世間莊嚴―「大」衆功德」「上首功德」「主功德」

・浄土論では「器世間莊嚴(国土莊嚴)」十七種で、浄土をの様相を表現したあと、「衆生世間莊嚴」十二種で浄土に生きる仏(八種)・菩薩(四種)のことを説いている。

・今はその仏莊嚴八種のうちの五・六・七に当たる「衆功德」「上首功德」「主功德」が私の担当である。その前には「座功德」「身業功德」「口業功德」「心業功德」が説かれ、その前には「衆生名義」と言い、ここでは何故「衆生世間」というのが問われている。また、後ろには八番目として「不虛作住持功德」が説かれている。

## 五 仲間たち(衆功德)

【原文書き下し―東聖典より】

天人不動衆 清淨智海生

此の二句は莊嚴衆功德成就と名く。仏本と何が故ぞ此の莊嚴を起したまふと。有る如來法輪を説きたまふ下に、所有の大衆の諸の根の性欲は種種不同なり、仏の智慧に於て、若しは退ぞき若しは没す、等しからざるを以ての故に、衆純淨ならざるを見そなはず。所故に願を興したまへり。願は我れ成仏せむに、所有の天人皆如來の智慧清淨海より生ぜむ。「海」は仏の一切種智深広にして崖無く、二乗雜善の中下の死尸を宿さざることを言ふ。之を海の如しと喩ふ。是の故に「天人不動衆清淨智海生」と言たまへり。「不動」は彼の天人大乗根を成就して傾動すべからずと言ふなり。

【現代語訳―解説浄土論註一〇四頁より】

天人不動の衆、清淨の智海より生ず。

この二句は莊嚴衆功德成就と名づける。

仏はもと、なぜこの莊嚴をおこされたかというところ、ある如來を見られるに、説法をされるところに、あつまつたすべての大衆の根機、生まれつき習性、望みなどは種々不同であるため、(一味平等の) 仏の智慧についてゆけず、(二乗に) 退却したり(生死に) 沈没したりするものがあるので、大衆が等しく清淨ではない。

だから、願わくは私が仏となるからには、あらゆる天人はみな如來の智慧清淨海より生まれるように、との願いをおこされたのである。

「海」とは、一切きわめつくされた仏の智慧が深広で涯がなく、二乗のあさい、よせあつめの善にもとづく縁覚・声聞などの残がいは全くとどめないということで、これを海にたとえたのである。

だから「天人不動の衆、清浄の智海より生ず」とのたもうたのである。

「不動」とは、彼の国の天人は大乗の根性を全うして、けっして動じないということである。

### 【考察等】

・ 天人Ⅱ 浄土の菩薩聖衆のこと。それを天人というについては、『大経』

卷上末に「ただ余方に因順するがゆえに天・人の名有り。顔貌端正にして、世に超えて希有なり。容色微妙にして、天にあらざ人にあらず。みな自然虚無の身、無極の体を受けたり」とある。(島地一―三四)

(浄土が人間のための真実最高の教え即ち一乗究竟の極説であることを象徴する)  
 〈解説浄土論註一〇四頁〉

・ 一切種智Ⅱ 一切の法に通達して無碍なる仏智。普通は一切智と一切種智とを分け、世俗諦の差別の諸法を知る智慧を一切種智というが、ここは一切智即一切種智、世俗諦のままが、第一義諦である。

〈解説浄土論註一〇四頁〉  
 ・ 中下Ⅱ 声聞と縁覚。『十住毘婆沙論』に、菩薩乗・縁覚乗・声聞乗を次第に上・中・下乗とあるによる。  
 〈講解浄土論註一〇五頁〉

○ 仏の説法を聞きに来た大衆が、種々不同で、仏の智慧についてゆけず、退却したり、沈没したりするものがあるのを歎き、法蔵菩薩は大衆が等しく清浄であるようにと願われたのである。

○ 法蔵菩薩は「願わくは私が仏となるからには、あらゆる天人はみな如来の智慧清浄海より生まれるように、との願いをおこされた」というのであり、浄土の仏は「大乗の根性を全うして、けっして動じない」というのである。

○ 聖人は『教行信証』行巻(島地十二―四四)にこれを引用されている。

「海」と言ふは久遠より已来凡聖所修の雑修・雑善の川水を転じ、・逆謗闡提・恆沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実・恆沙万徳の大宝海水と成す。之を「海の如し」と喩ふるなり。良に知んぬ。『経』に説きて「煩惱の水解けて功德の水と成る」と言うが如し。

「願海」とは二乗雑善の中・下の屍骸を宿さず、何に況んや人天の虚仮・邪偽の虚仮邪偽の善業・雑毒雑心の屍骸を宿さん乎。

○ 『真宗大辞典』には次の様に書かれている。

大衆功德とは極楽浄土の不動の大衆を生ずる功德である。天人不動衆とは極楽浄土の聖衆を云う。(略) 大乘菩薩の根性を大乘根と云う。即ち一切の衆生を救はんと欲する大志を大乘菩薩の根性とする。(略) 浄土の諸の菩薩は如何なる事縁に遇うも、大志を動乱撓屈することなきが故に不動衆と云う。

## 六 須弥山王のごとし (上首功德)

【原文書き下し―東聖典より】

如須弥山王 勝妙無過者

此の二句は莊嚴上首功德成就と名く。仏本何が故ぞ此の願を起したまふ。有る如来を見そなはずに、衆の中に或は強梁の者有り、提婆達多の流比(たぐい)の如し。或は国王と仏と並に治めて甚だ仏に推(ゆず)ることを知らざる有り、或は仏を請じて他縁を以て廃忘すること有り。是の如き等の上首の力成就せざるに似たる有り。是の故に願じて言たまはく。「我れ仏たらむ時、願は一切大衆、能生の心無くして、敢て我と等しからむ、唯一り法王として更に俗王無からむと。是の故に「如須弥山王勝妙無過者」と言たまへり。

【現代語訳―解説浄土論註より一〇五頁より】

須弥山王のごとく、勝妙にして過ぎたる者なし。

この二句は莊嚴上首功德成就と名づける。仏はもと、なぜこの願いをおこされたかという、ある如来をみられるのに、教化せられる大衆のなかにことさらに強がる者がおる。たとえば提婆達多のたぐいなどである。あるいは国王と仏とが並んで国を統治していて、仏にゆずることをまったく知らないものがある。あるいは仏を招請しておきながら、ほかの用事にとりまぎれてすっかり忘れてしまったりすることがある。このように大衆の上首たる力が徹底していないようにみえることがある。

だから、願わくは「私が仏となるときは、すべての大衆は自らの力で浄土に生まれたという思いをいただくことなく、私とさとりを同じくせしめ、しかもただひとり法王としてあり、くらぶべき俗王のないようにしたい」と願っていたのである。

だから「須弥山王のごとく、勝妙にして過ぎたる者なし」とのたまうたのである。

### 【考察等】

・ 上首Ⅱ 『法華論』に「如来を上首と為すとは、諸菩薩等は如来に依って

住するが故に、彼の如来は彼の国土の諸の大衆中に於いて自在を得るを以ての故なり」とある意。大衆を統率して如意なるを上首というのである

つて、単に一会の上座という意味ではない。〈講解浄土論註一〇六頁〉  
 ・ 強梁者 〓 『老子』第四十二章に出る語。ものは陰と陽とが結合調和して一つになったところではじめて真の働きをなすと説き、この自然の理に違背するものは必ず不幸をまねくという。そして「強梁者不得其死（強梁なる者は死という自然の理にも違背する）」と教えている。

即ち強がる（陽）者は、かえって弱さ（陰）をばく露するということ。梁は屋根をささえる横木で、それがあまりに強すぎれば柱とのつりあいにとれず、全体を破壊してしまう。 〈解読浄土論註一〇六頁〉

・ 諸仏以他縁廢忘 〓 『智度論』卷九、『十誦律』卷十四・二十六などに出る。毗羅然国（ヴェーランジャー国）の阿耆達王というものが、仏を一夏の安居に招請しておきながら、夏がくるころには自分の慰安のためにすっかりそのことを忘れて、仏に迷惑をかけたという。

無能生心敢与我等 〓 通途の読み方では「心を生じて敢えて我と等しかること無く」（はりあう心を起こして私と等しくなろうとすることなく）と読む。 〈解読浄土論註一〇六頁〉

○ 仏は尊敬される最高の「王」であり、「すべての大衆は自らの力で浄土に生まれたという思いをいだくことなく、私とさとりを同じくせしめ」たいと願われるのである。上首とは「ある一団の中で上位、また最上位の者。転じて、教えのなかの最上の法。」（コトバンク）をいうのである。

○ 『真宗大辞典』には次の様に書かれている。

阿弥陀仏は極樂浄土の上首であるを上首功德と云う。『大経』下巻に「無量寿仏の威徳巍巍々として須弥山王の高く一切諸世界の上に出づるが如し」と説くも亦この意義である。天親の『法華経論』卷上には「如来を上首となすは、諸の菩薩等は如来に依りて住するが故なり、如来は彼の国土の一切大衆の中に於て自在を得るを以ての故なり」とあり、慧然の『論註顯深義記』には「上首とは元首と言んが如し、前の不動衆に簡んで仏を上首と名く、一会の上座を名けて上首とするが如きに非ず」とある。

さてこの上首功德と国土功德中の主功德の区別如何と云うに、国土功德に属するものは国主の勝れたることを以て依報即ち国土の莊嚴を表わし、この上首功德は正報即ち直ちに仏の莊嚴を表わすが故に、彼此の趣は同一ではない。又この子の上首功德と仏功德中の主功德との差別如何と云うに、主功德は主伴の義の主であり、上首功德は大衆の中の上首たることを示すにあれば、彼此の意義が異なっている。

## 七 恭敬の道（主功德）

【原文書き下し―東聖典より】

天人丈夫衆 恭敬繞瞻仰

此の二句は莊嚴主功德成就と名く。仏本何が故ぞ此の莊嚴を起したまふと。有る仏如来を見たてまつるに、大衆有りとは雖も、衆の中に亦甚だ恭敬せざる有り。一の比丘釈迦牟尼仏に語らば、若し我ために十四の難を解せずんば、我れ當に更に余道を学せむといひしが如し。亦居迦離、舍利弗を誘じて仏三たび語るに三たび受けざりしが如し。又諸の外道の輩、仮に仏衆に入りて、常に仏の短を伺ひ求めしが如し。又第六天の魔、常に仏所に於して諸の留難をなししが如し。是の如き等の種種の恭敬せざる相有り。是の故に願じて言まはく。我れ成仏せんに、天人大衆恭敬して倦（ものう）きこと無らしめん。所以（このゆえ）に但天人と言ふは、淨土には女人及び八部鬼神無きが故なり。是の故に「天人丈夫衆恭敬繞瞻仰」と言たまへり。

【現代語訳―解説浄土論註より一〇七頁より】

天人丈夫の衆、恭敬して繞りて瞻仰したてまつる。

この二句は莊嚴主功德成就と名づける。

仏はもとなぜこの莊嚴をおこされたかという、ある仏如来を見られるに、所化の大衆があつても、そのひとびとのなかに仏を仏としてうやまわれないものがある。たとえばある比丘が釈迦牟尼仏に告げて、もし私のために十四の難問を解いてくれないければ、私はほかの道を学ぼうとおもう、といったようなものである。また居迦離が舍利弗をそしつたのに対して、仏は三度いさめられたが三度とも拒否した、というようなものである。また外道の輩たちが、かりそめに仏の聴衆にまじつて、つねに仏の短所がないかと、うかがっていたようなものである。また第六天の魔王がつねに仏のもとへやってきて、いろいろの妨害をくだてたというようなことで、このような仏をうやまわらないいろいろの相がある。

だから、私が仏となるからには、天人大衆は恭敬してもものうきことのないように、と願つていわれたのである。

だから、ただ天人といっているのは淨土には女人や八部鬼神（というような人のそしりをうけるもの）がないからである。

それで「天人丈夫の衆、恭敬して繞りて瞻仰したてまつる」とのたもうたのである。

### 【考察等】

・ 丈夫衆Ⅱ 『涅槃經』によれば四法を具足する者を丈夫という。四法

とは、一近善知識、二能聴法、三思惟義、四如説修行。これら四法無き者は、身体が丈夫であつても行いは畜生に同じだとある。

- ・ 如一比丘云云 、『智度論』卷十五に出る。一比丘の疑難に対して仏は最後にこう答えている。「我は老病死の人の為に法を説いて済度す。此の十四難は是れ鬪諍の法なり。法に於いて益なく、但だ是れ戯論なり。何ぞ問いを為すことを用いん。若し汝が為に答うとも、汝が心了せず。死に至るまで解けず。生老病死を脱するを得ること能わざらん。(大正蔵二一五・一七〇a)

〈解説浄土論註一〇八頁〉

十四難 、『智度論』卷二では、

- ・ (1) 世界及び我は常なるや。
- ・ (2) 世界及び我は無常なるや。
- ・ (3) 世界及び我は亦有常にして亦無常なるや。
- ・ (4) 世界及び我は亦有常にも非ず亦無常にも非ざるか。
- ・ (5) 世界及び我は有辺なるや。
- ・ (6) 無辺なるや、
- ・ (7) 亦有辺にして亦無辺なるや。
- ・ (8) 亦有辺にも非ず亦無辺にも非ざるか。
- ・ (9) 死後に神(心)は後世に去ることあるや、
- ・ (10) 神は後世に去ること無きや、
- ・ (11) 亦神は去ることも有り、亦神は去ることも無きや、
- ・ (12) 死後、亦神は去ること有るにも非ず、亦神の後世に去ること無きにも非ざるか。
- ・ (13) この身は是れ神なるや。
- ・ (14) 身異なり、神異なるや。

〈解説浄土論註一〇八頁〉

- ・ 居迦離 、『Kokaiika 提婆達多の親友。舍利弗・目連をののしつたため地獄に堕ちたという。』『智度論』十三によれば、あるとき舍利弗と目連の二人は夏安居をおえて諸国を遊行していたが、大雨にあつて民家に一泊した。その家に若い女が泊っていたが、暗くなっていたので二人はそのことを知らなかった。あくる朝、女は体を水で洗っていたが、それを偶然目撃した居迦離は、しばらくして家から出て来た舍利弗・目連の姿を見て、つつきり二人が不浄をなしたと思ひ込み、良い機会とばかり諸国にそのことをふれ歩いた。

うわさは釈尊の耳にまで到り、居迦離は仏前において事実を証明してみせようと企てた。釈尊はその居迦離に対し、「舍利弗と目連とは心淨くして柔軟なり、汝これを謗つて長夜に苦を受くることン莫れ」といさめたが、居迦離はあくまでも事実だといひはった。仏は「三たび訶し

たまうに、居迦離は三たび受けず」（大正蔵二五・一五七b）ために居迦離はその夜のうちに死し、大蓮華地獄に堕ちた、とある。

〈解説浄土論註一〇九頁〉

- ・ 如諸外道輩云云 〓 『智度論』卷五十八による。「爾の時、諸の外道の梵志、仏の所に来向して仏の短を求めんと欲す」（同・四七〇a）とある。帝釈天の福德によって、これらの外道は最後に「遙かに仏をめぐり、道をかえりて去れり」とある。

〈解説浄土論註一〇九頁〉

- ・ 如第六天魔云云 〓 『智度論』第五十六による。第六天魔とは欲界の最高天他化自在天の主。これを魔というのは、仏道修行にはげむ菩薩を誘惑し欲界に堕しめようとし、また自ら諸々の邪見を懐いているからである。「正行を憎嫉し、狂愚にして自ら高ぶり、仏を沙門瞿曇（くどん）と呼ぶ。仏は其の實の名を称して弊魔と為し、相違するを以ての故に名けて怨家と為す」（同四五八c）

〈解説浄土論註一〇九頁〉

- ・ 八部鬼神 〓 仏法を守護するといわれる八部の異類。天（Deva）・龍（Naga）・夜叉（Yaksa）・乾闥婆（Gandharva）・阿修羅（Asura）・迦楼羅（Garuda）・緊那羅（Kimnara）・摩睺羅伽（Mahoraga）。

また一説によれば四天王所領の八部の鬼衆のことともいわれる。

乾闥婆・毘沙門（Vaiśravaṇa）・鳩槃荼（Kumbhanda）・閉麗多（Preta）・富单那（Putana）・夜叉・羅刹（Raksasa）。いずれも人非人衆といわれる。

〈解説浄土論註一〇九頁〉

○ 『真宗大辞典』には次の様に書かれている。

『浄土論』には三種莊嚴二十九種が説かれているが、その中に主功德と名くるものが二種ありて、一は国土莊嚴功德十七種の中の第十二を莊嚴主功德と名け、他の一は仏莊嚴功德八種の中の第七を莊嚴主功德と名けてある。

前者は（中略）正覚成就の阿弥陀仏が善巧に維持する所の国土であるが故に、その国土が優れていると示す意であって、即ち能住持の仏を掲げて所住持の国土の優勝なることを表示したるものである、そこで法王住持功德と名けても宜いのである。

後者は（中略）阿弥陀如来が大衆より恭敬せらるる徳を云う。（中略）龍樹の十二礼に十方所来諸仏子、顕現神通至安樂、瞻仰尊顏常恭敬と言い、大経に東方無数の菩薩衆皆悉く無量寿仏所に詣で恭敬に供養する等と言える是なり。（中略）要するに大衆の恭敬を以て主仏の徳の優勝なることを表示したものである。

○ 仏の世界（浄土）には、魔王や鬼神のように仏を敬わないものはいないの

である。すべてのものが仏を主として「恭敬して繞りて瞻仰する」のである。

○ 蓮如上人は「仏法を主とし、世間を客人とせよ」と教えられた。主を持つとは、自分が傲慢ではなく謙虚になることである。そこには懺悔と感謝の世界が開けて来る。

○ 私達はこの「衆生世間莊嚴」の十二種莊嚴で、浄土に生きる仏・菩薩は何を願いどの様な道を歩むのかを学ぶのであり、天親菩薩・曇鸞大師がこれを通して教えて下さる智慧を学ばなくてはいけない。それは究極の教えとしての「念仏道」につながるものである。

— 以上 —